

# コンテナ式養液栽培におけるガーベラの栽植密度

## 1. はじめに

ガーベラの収量増加、品質向上および土壌病害回避を目的に、市販のプランター（64×24×19cm）を用いたコンテナ式養液栽培技術の開発に取り組んでいる。ここでは、栽植密度を検討したので結果を紹介する。

## 2. 試験方法

1998年6月26日、粒径20mm以下のフェノール発泡樹脂を15Lずつ詰めた市販のプランターに定植した。株間24cmになるようにプランターを設置し、試験区は、プランター当たり2株植え（4.3株/m<sup>2</sup>）および3株植え（6.5株/m<sup>2</sup>）の2区とし、品種は「ロンボック」（多分枝タイプ）および「ランバダ」（標準タイプ）を使用した。給液はノズルピッチ10cmの点滴灌水チューブを用い、プランター当たり5ノズルを設置した。培養液は、園試処方を用い、EC1.5~2.0ds/mの範囲で管理した。1日当たりの給液量は、198ml/回/プランター×7回とした。

## 3. 試験結果

m<sup>2</sup>当たりの切り花本数は、両品種とも3株区が2株区より多く、「ランバダ」で22.6%、「ロンボック」で5.6%の増収率となった。しかし、切り花重は、2株区が3株区より優れた（表1）。

花径および茎径は、栽植密度による差は見られなかった。奇形花の発生数は「ロンボック」で3株区が2株区より多くなった（表1）。

切り花長別収量の比率は、「ランバダ」、「ロンボック」とも栽植密度による大きな差は見られなかった（図1）。

種苗費を400円/株とすると「ロンボック」では2株区の方が3株区より収益性が高くなった（表2）。

## 4. まとめ

本試験の結果から、市販のプランターを用いたコンテナ式養液栽培におけるガーベラの栽植密度は、「ランバダ」のような標準タイプでは、密植することによる増収効果が高いと思われる。（園芸部 里村 博輝）

表1 養液栽培におけるガーベラの栽植密度と収量および切り花品質との関係

試験区	切り花本数	増収率	切り花長	花径	茎径	切り花重	奇形花
品種名 栽植密度	(本/m <sup>2</sup> )	(%)	(cm)	(cm)	(mm)	(g)	(本)
ロンボック 3株	634.0	105.6	50.5	6.5	5.0	13.3	38.2
ロンボック 2株	600.2	100.0	51.2	6.6	5.0	13.8	22.2
ランバダ 3株	476.1	122.6	52.0	7.4	5.4	17.4	17.1
ランバダ 2株	388.4	100.0	49.3	7.4	5.4	17.8	17.2

注)定植:1998.6.26、切り花本数:1998.8~2000.4  
栽植密度:1プランター当たり

表2 栽植密度と粗収益、種苗費の試算 (円/m<sup>2</sup>)

品種名	栽植密度	粗収益(A)	種苗費(B)	A-B
ロンボック	3株	13,948	2,600	11,348
	2株	13,204	1,720	11,484
ランバダ	3株	10,474	2,600	7,874
	2株	8,545	1,720	6,825

注)粗収益:切り花本数×単価(22円)

種苗費:400円/株

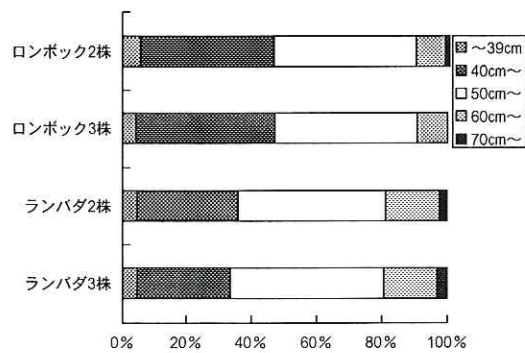


図1 栽植密度と切り花長別収量との関係